

スペイン語の主題に関する一考察 ——日本語との対照を通じて——

Tema en español —un estudio contrastivo con el japonés—

福島教隆

Noritaka FUKUSHIMA

1. はじめに

本稿の目的は、「主題(topic)」の概念がスペイン語(イスパニア語)ではどのような形で表されるかを、日本語と対照しつつ考察することにある。¹⁾特に、一文中に複数の主題が重層的に現れる現象に焦点を当て、両言語の特質を探ってみたい。

Li *et al.* (1976) は、「主語中心の言語 (subject prominent language)」と「主題中心の言語 (topic prominent language)」という区分を設けることを提案し、多くの研究者に受け入れられた。前者は、「主語+述語」という形の文を指向するものであり、後者は、文を「主題+解説」という構造で表現しようとする傾向がある。同論文によれば、日本語はこの2つの型を兼ねた言語だという。一方、スペイン語は「主語中心の言語」とされる。事実、日本語には「は」という主題を表す明示的な形式があるが、スペイン語にはそれがなく、主題を表現するには、さまざまな手段を用いざるを得ない。そのため、スペイン語圏の研究者にあって、何を主題と見るかについて意見がまちまちであり、大きく相違する場合もある。

拙稿(2004, 2006)では、日本語話者の直感を基準として利用する方法を提案した。即ち、日本語に訳した時に主題の「は」が必要とあるような句をスペイン語の主題性の高い要素と見なすのである(対比の「は」は除く)。本稿でもこの基準を踏襲して考察を進める。

2. スペイン語の主題

では、スペイン語ではどのような手段で主題が表されるかを概観しよう。先述の基準によれば、以下のような事例に主題性の高い要素が認められる。下線を付した個所が主題に当たる。日本語訳では「は」が対応している。

まず、(1)のような休止、カンマ、(2)の抑揚、(3)の「～については」を表す語句、(4)の定冠詞は、主題を表す役割を果たしていると思なし得る。

(1) 休止、カンマ

Pues yo, seré actor.

well I will be actor

つまり僕は俳優になりたいんだ。

(2) 抑揚 (大文字の部分卓立させる)

Me echó el auto encima, cuando iba en la moto yo.
me threw the car up when (I) went by the motorcycle I

Que **LA MOTO** me la hizo tira.
that the motorcycle me it made strip

私はバイクに乗っていて車にはねられた。バイクはぼろぼろになった。

(3) 「～については」を表す語句

{**Respecto a / En cuanto a**} **a ella** puedes estar seguro.
as for as for to hers (you) can be sure

彼女のことは大丈夫だ。

(4) 冠詞

Ayer bebí **un zumo** y me comí **una hamburguesa**.
yesterday (I) drank a juice and (I) myself ate a hamburger

El zumo era de tamaño grande, pero **la hamburguesa** era muy pequeña.
the juice was of size big but the hamburger was very small

昨日、ジュースを飲み、ハンバーガーを食べた。ジュースは Lサイズだったが、ハンバーガーはとても小さかった。

次に、本来文頭には置かない要素を「文頭に置く」という操作によって主題を表す方法がしばしば用いられる。まず (5) の事例を見られたい。無標の語順の文 (5a) の目的語を前置して (5b) のようにすると、el detalle (詳細は) の部分が主題になる。この目的語は代名詞 lo で重複して表現され、生成文法でいう「左方転位 (left-dislocation)」の形になっている。²⁾ (5c) では主題が旧情報を担っていることが文脈から明らかである。また、(5d) は日本の小説のスペイン語訳から得られた例である。原文では「解決する」の直接目的語「トラブル」が主題になっており、スペイン語訳ではそれに対応する語を文頭に出して、それを代名詞で受けている。

(5) 文頭に置く (目的語, その1) "left-dislocation" (左方転位)

a. La comisión conoce el detalle.
the commission knows the detail

委員会が詳細を知っている。

b. **El detalle** { lo / *φ } conoce la comisión.
the detail it knows the commission

詳細は委員会が知っている。

c. —¿Dónde viste a mis padres?

where (you) saw to my parents

—A tus padres, { los / *φ } vi en el teatro.

to your parents them (I) saw in the theater

「どこで私の両親に会ったの?」「君のご両親には劇場でお会いしたんだよ」

d. —Los problemas que cause mi cuñado deberá usted solucionarlos

the problems that may cause my brother-in-law must you solve-them

en el mismo pabellón.

in the same pavillion

「義弟が起こしたトラブルは離れの中で解決して下さい」(小川洋子『博士の愛した数式』p.8, *La fórmula preferida del profesor*, trad. de Y. Sugiyama et al., p.15)³⁾

なお、目的語を前置するとき、(6)のように代名詞の重複が伴わないこともある。これは新情報を表す点で(5)とは異なる。生成文法ではしばしばこの構文が「主題化(topicalization)」が行われた文と見なされてきたが、少なくともスペイン語では、これは主題とは言えず、名称に問題があるように思われる。

(6) 文頭に置く(目的語, その2) "topicalization" (主題化)

—¿A quiénes viste en el teatro?

to whom (you) saw in the theater

—A tus padres, { *los / φ } vi en el teatro.

to your parents them (I) saw in the theater

「劇場で誰に会ったの?」「劇場で君のご両親にお会いしたんだよ」

主語は無標の語順でも文頭に立つことが多いので、文頭に置かれた主語が主題的機能を果たしているのか否かを知ることは困難だが、時にそれが判別できる場合がある。(7a)では従属節の主語が、節の境界を超えて外置されている。(7b)では部分疑問文の主語が、疑問詞の前に位置している。文字言語の場合は倒立疑問符やカンマの存在により、主語が疑問の焦点の外にあることが一層明瞭である。

(7) 文頭に置く(主語)

a. Luis creo que está enfermo.

Luis (I) think that is ill

ルイスは病気ようだ。(Real Academia Española et al. (2009), II, p.2980)

b. —El señor, su cuñado, ¿dónde está ahora?

the gentleman your brother-in-law where (he) is now

「弟さんは今、どちらに？」 (『博士の愛した数式』 p.7, *La fórmula preferida del profesor*, p.14) ⁴⁾

主語、目的語以外の要素が文頭に置かれる場合も、主題性が高いと考えられることがある。(8a) では前置詞句が主たる要素に先行しており、邦訳ではこれに「は」が用いられている。(8b) は、原文で「は」が使用された句が、スペイン語訳では文頭に配されている事例である。

(8) 文頭に置く (その他の要素)

- a. —Y dentro de la piñata podéis meter pastillas para la artrosis,
and inside of the container (you) can put pills for the arthrosis
pastillas para la incontinencia, pastillas para la tensión... —mi abuelo
pills for the incontinence pills for the blood pressure my grandfather
estaba por verlo todo negro.
was to see-it all black

「くす玉の中には、関節炎や血圧の薬を入れるがいいさ。それに失禁薬もな……」
だめだ、おじいちゃん。完全に、夢も希望もなくしてる。(E. Lindo, *Manolito Gafotas*,
p.121, 『めがねっこマノリート』, とどろき しずか訳, p.198)

- b. En la numeración decimal que utilizamos normalmente es conveniente
in the numbering decimal that (we) use normally (it) is convenient
emplear el logaritmo de base 10, (...).
to employ the logarithm of base 10

普段使っている十進法では、10 を底にする対数を用いるのが便利で、(.....)。 ⁵⁾

(『博士の愛した数式』 p.175, *La fórmula preferida del profesor*, p.205)

また、(9a) のような無標の文を、疑似分裂文 (9b) に改めて、情報の焦点を後置することによって、文頭に主題を立てることができる。

(9) 疑似分裂文

- a. Quiero ver a Belmonte.
(I) want to see to Belmonte
私はベルモンテに会いたい。
- b. A quien quiero ver es a Belmonte.
to whom (I) want to see is to Belmonte
私が会いたいのはベルモンテだ。

以上のように、本稿で設けた基準に従えば、(1) ~ (4), (5b, c, d), (7), (8), (9b)

のような文に主題性の高い要素を見出すことができる。スペイン語では文頭という位置が重要な役割を果たしていることが確認できる。

3. 多重主題と重層主題

1つの文の中に複数個の主題が含まれる場合がある。本節ではこの現象に着目し、スペイン語と日本語の主題の違いを探る手掛かりとしてみたい。まず、次の例を検討しよう。

(10) 多重主題

a. Mi abuela el arroz lo hacía siempre muy caldoso.

my grandmother the rice it used to cook always very soggy

祖母は ご飯はいつも汁気たっぷりに炊いたものだ。

(Real Academia Española *et al.*, 2009, II, p.2975)

b. A él, el desayuno, los domingos se lo sirven en la cama.

to him the breakfast the Sundays him it (they) serve in the bed

彼は 朝食は 日曜日にはベッドに持ってきてもらうことにしている。(Real Academia Española *et al.*, 2009: II, 2975)

このように、日本語と同様、スペイン語では複数個の主題を持つ文を作ることができる。ただし Real Academia Española *et al.* (2009: II, 2975)が “Los tópicos iniciales pueden concatenarse, pero raramente lo hacen fuera de la lengua conversacional o de las variantes de la escrita que la reflejan.” (文頭の主題は連続することができるが、話し言葉または話し言葉を反映した書き言葉以外ではあまり見られない。)と指摘するように、口語的な文体で許される形式である。主語、目的語、その他の要素が文頭に並置されている。このような主題を「多重主題」と呼ぶことにしよう。

ところが、スペイン語では、主題の内部の要素を取り出して文頭に配置する、次のような文が存在する。

(11) 重層主題

a. Yo a quien quiero ver es a Belmonte.

I to whom (I) want to see is to Belmonte

私 {が/*は} 会いたいのはベルモンテだ。(J. Alonso García, *Historia de Madrid*, p.111) (← (9b) ← (9a))

b. Tú lo que tienes es un miedo vulgar a los infiernos.

you what (you) have is a fear vulgar to the hell

君 {が/*は} 心に抱いているのは, 地獄への俗っぽい恐れだ。(J. Calvo Sotelo, “La

muralla”, p.159)

c. Usted lo que se proponía era cederlo.

you what (you) set yourself was to transfer-it

あなた {が/*は} したかったのは、それを人に譲ることでしたね。(Ibid., p.173)

d. Yo lo que digo es que ahora, ¿qué hacemos?

I what (I) say is that now what (we) do

私 {が/*は} 言っているのは、これからどうするかということだ。(F. Fernán-Gómez, *Las bicicletas son para el verano*, p.123)

e. Este idiota lo que quería es humillarme.

this idiot what (he) wanted is humiliate-me

この愚か者 {が/*は} したかったのは、私を辱めることだ。(A. Paso, “La corbata”, p.307)

f. A mí lo que me parece es que los americanos no lo explican.

to me what me (it) seems is that the Americans not it explain

私 {に/*には} 思えるのは、アメリカ人はその理由を説明していないってことだ。
(Esgueva et al. (eds.), 1981, p.48)

g. Dice mi padre: tú lo que tienes que hacer es enfrentarte si te pegan.

says my father you what (you) have to do is to confront if you (they) hit

パパは、やられたら、やりかえせと言う。(直訳：私の父は言う。「君 {が/*は} しなければならないのは、もし殴られたら立ち向かうことだ。’) (*Manolito Gafotas*, p.36, 『めがねっこマノリート』 p.59)

h. Tú lo que estás es loco, (...).

you what (you) are is crazy

君 {が/*は} 今いる状態は 狂気の状態だ。(Real Academia Española et al., 2009: II, 2975)

これらの実例では、前節で述べた (9b) のような疑似分裂文の主題となる節 (下線部) の中から、主語、目的語、叙述補語 (二重下線部) が出て、文頭に置かれている。主題の中から更に主題を立てることは日本語ではあり得ず、(11) の各文の二重下線部に「は」を充てて訳すと、あまり自然な文ではなくなる。

従って、本稿の基準によればこの部分は主題とは呼びがたいが、少なくとも主題に準じる性質を持った要素だと言えよう。その根拠は、第1に、文頭という、主題性を帯びやすい位置を占めていること、第2に、従属節内の要素が節の境界を超えて外置されるという

点で、先述の (7a) の主題との共通性が認められることである。このような構文の主題、およびそこから外置された要素（以下、「準主題」と呼ぶ）を合わせて「重層主題」と名付けよう。

「多重主題」と「重層主題」の違いを図式化すると、次のようになる。前者は複数個の主題が同一階層に並置されているのに対し、後者では、主題と、それより文の階層の低い準主題とが現れた形になっている。多重主題は日本語、スペイン語ともに見られるが、重層主題は、日本語ではスペイン語に比べ文法性が低いと言える。⁶⁾

(12) 多重主題と重層主題

a. 多重主題： [主題1 X] [主題2 Y] [主題3 Z] V

b. 重層主題： [準主題 X_i] [主題 ... [X_i] ...] V

スペイン語で重層主題の形式が多用されていることは、Real Academia Española が公開している電子コーパス Corpus de Referencia del Español Actual (略称 CREA) によって確認できる。たとえば、yo (私) を準主題とする重層主題の文 (13a, d) の例が多数得られる。特に (13a) は、対応する単なる疑似分裂文 (13b, c) のいずれをも個数の点で上回っていることに注意されたい。また 1 人称以外の要素を準主題とする (13g, h) のような例の存在も確認できる。⁷⁾

(13) 重層主題と電子コーパス

- a. Yo lo que creo es que... (私が思うのは...) ----- 29 例
- b. Lo que {yo creo / creo yo} es que... (私が思うのは...) ----- 順に 23 例, 2 例
- c. Lo que creo es que... (思うのは...) ----- 23 例
- d. Yo lo que quiero es que... (私が望むのは...) ----- 26 例
- e. Lo que {yo quiero / quiero yo} es que... (私が望むのは...) ----- 順に 6 例, 0 例
- f. Lo que quiero es que... (望むのは...) ----- 53 例
- g. {Usted / Él} lo que quiere es que... (あなた・彼が望むのは...) ---- 各 1 例
- h. El {doctor / portero} lo que dice es... (博士・守衛が言うには...) ---- 各 1 例

以上の観察などから、重層主題構文の特徴は、次のように記述できる。

(14) 重層主題の特徴

- a. 重層主題構文は「従属節内要素の外置」構文 (→ (9b)) の一種で、疑似分裂文の主語節 (関係節) からの外置である。準主題 (外置された要素) と主題 (主語節) を持つ。
- b. 準主題は 1 人称の人称代名詞を含む句が多いが、2・3 人称、また一般の名詞も可。
- c. 準主題は従属節の主語の機能を果たす語句が多いが、間接目的語や叙述補語も可。

- d. 主題となる節の動詞は *creer* (思う), *parecer* (思われる), *decir* (言う), *querer* (望む) など, 思考・発話・願望タイプが主。
- e. 主題となる節の動詞の時制は現在形が多いが, その他の時制も可。
- f. 主題となる節の関係詞は *lo que* が多いが, *quien* も可。
- g. 口語的な文体で用いられる。
- h. 統語的に複雑な構文である。たとえば, *Yo lo que creo es que...* (私が思うのは...) を (*Yo*) *creo que...* (私は...だと思う) という無標の文と比較されたい。
- i. 「思考・発話・願望を行う者」を主題の中から取り出して示したいときに, この構文を使うことが多い。たとえば「私はですね, 何が言いたいかと言うと, ~なんです」といったニュアンスを生むようである。

4. むすびと今後の課題

第2節では, 日本語の「は」を基準にしたスペイン語の主題の記述を提案した。第3節ではそれを発展させて, スペイン語には「重層主題」という形式が存在することを指摘し, その記述を行った。この2点をもって本稿の結論とする。

最後に, 日本語では座りの良い表現とは呼びがたい「重層主題」がなぜスペイン語では広く用いられるかについて, 管見を述べてみたい。第1節で述べたように, *Li et al.* (1976) によれば, 日本語は「主語中心」であると同時に「主題中心」の言語であるから, 「主題 + 評言 (*comment*)」という形式は重要な構造であり, これを維持しようとする傾向があると考えられる。一方, スペイン語は「主語中心」の言語であるから, 「主題 + 評言」は「主語 + 述語」ほど重要な構造ではなく, その維持は必ずしも問題とはならない。

さて, 「重層主題」構文は「多重主題」構文とは異なり, 主題だけでなく, それより階層の低い要素をも準主題として評言と結ぶ形式であり, 「主題 + 評言」の単一の階層での対応を崩すことになる。これは「主題 + 評言」の構造を文の基本とする言語にとっては, 体系の本質に関わる大きな問題であるが, 「主題 + 評言」を基本としない言語にとっては, それほど重大な問題ではなく, 表現効果などの点で価値があれば, 許容される可能性がある。以上のような事由から, 「重層主題」構文は日本語ではあまり好まれず, スペイン語では抵抗なく受け入れられるのではないだろうか。即ち, この形式の許容度の差は, 日本語が主題中心の傾向が強く, スペイン語が主語中心の傾向が強いことの現れの1つだと考えてみたいのである。これは示唆の段階に過ぎず, その論証にはより精緻な議論が必要であることは言うまでもないが, ひとまず今後のスペイン語と日本語の対照研究の手がかりとないかも知れないと考え, 記しておく。

註

*本稿は、慶應義塾大学三田キャンパスで開催された日本ロマンス語学会第48回大会にて2010年5月22日に行った口頭発表に基づくものです。貴重なご意見を下さった諸先生方、丁寧に査読して下さいました先生方に御礼申し上げます。

1) スペイン語と日本語の主題の対照研究には、野田(1994), Hotta(1999), Jiménez Juliá(1996)などの優れた論考がある。その概要については拙稿(2003)を参照されたい。

2) Rivero(1980)などの用語。(6)の topicalization(主題化)も同様である。

3) なお、フランス語訳、イタリア語訳ではこの部分は次のように訳されている。

(i) —Solutionnez à l'intérieur du pavillon les problèmes qu'il vous cause. (*La formule préférée du professeur*, trad. par R-M. Makino-Fayolle, p.11)

(ii) «Inoltre vorrei pregarla di risolvere tutti i problemi di mio cognato all'interno della dépendance.» (*La formula del professore*, trad. di M. De Petra, p.12)

4) フランス語訳、イタリア語訳は次のとおりである。

(iii) —Monsieur votre beau-frère, où est-il en ce moment? (*La formule préférée du professeur*, p.11)

(iv) «In questo momento suo cognato dove si trova?» (*La formula del professore*, p.12)

5) フランス語訳、イタリア語訳は次のとおりである。

(v) Dans la numérotation décimale utilisée habituellement, il était pratique d'employer les logarithmes de base 10, (...). (*La formule préférée du professeur*, p.170)

(vi) Nella normale numerazione decimale, l'uso di logaritmi a base 10 è molto utile ed essi vengono chiamati logaritmi decimali. (*La formula del professore*, p.137)

6) なお、Real Academia Española *et al.* (2009) は、先述の説明の例として(10a, b)だけでなく(11b)も挙げており、多重主題と重層主題を区別していない。

7) 検索は2010年5月に実施し、「全年代、全分野、全地域」の大文字始まり、及び小文字始まりの該当例を対象とした。

引用文献

Esgueva, Manuel y M. Cantarero (eds.) (1981): *El habla de la ciudad de Madrid*, Consejo Superior de Investigaciones Científicas, Madrid.

Hotta, Hideo (堀田英夫) (1999). “El sujeto y el tema —un estudio contrastivo del español y el japonés—”, *Lingüística Hispánica* 22, pp.1-20, 関西スペイン語学研究会。

Jiménez Juliá, Tomás (1996). “Eje temático y tema en español”, Manuel Casado Velarde *et al.* (eds.): *Scripta philologica in memoriam Manuel Toboada Cid*, Universidade da Coruña, A Coruña, I, pp.453-492.

Li, Charles N. & S. Thompson (1976): “Subject and topic: a new typology of language”, Charles N. Li (ed.): *Subject and Topic*, Academic Press, New York, pp.457-489.

野田尚史 (1994): 「日本語とスペイン語の主題化」, 『言語研究』105, pp.32-53, 日本言語学会。

Real Academia Española y Asociación de Academias de la Lengua Española (2009): *Nueva gramática de la lengua española*, Espasa, Madrid, 2 vols.

Rivero, María-Luisa (1980): “On left-dislocation and topicalization in Spanish”, *Linguistic Inquiry* 11, pp.363-393, The MIT Press, Massachusetts.

拙稿 (2003): 「スペイン語と日本語の主題の対照研究の動向」, *Clavel* 1, 対照研究セミナー, pp.48-58。

_____ (2004): 「スペイン語の主題に関する記述的研究」, 益岡隆志・編: 『主題の対照』, くろしお出版, pp.129-148。

_____ (2006): “Tema en español”, *Moenia* 11, Universidade de Santiago de Compostela, Santiago de Compostela, pp.229-248.

例文出典

Alonso García, Jorge (1984): *Historia de Madrid*, Editorial Genil, Madrid.

Calvo Sotelo, Joaquín (1959): “La muralla”, Federico Carlos Sainz de Robles (ed.), *Teatro español 1954-55*, Aguilar, Madrid.

Fernán-Gómez, Fernando (1984): *Las bicicletas son para el verano*, Espasa Calpe, Madrid.

Lindo, Elvira (1994): *Manolito Gafotas*, Alfaguara, Madrid. / (2005): 『めがねっこマノリート』, とどろき しずか訳, 小学館。

小川洋子 (2003): 『博士の愛した数式』, 新潮社。 / (2008): *La fórmula preferida del profesor*, trad. de Yoshiko Sugiyama y Héctor Jiménez Ferrer, Funambulista, Madrid. / (2008): *La formule préférée du professeur*, trad. par Rose-Marie Makino-Fayolle, Actes Sud, Arles. / (2008): *La formula del professore*, trad. di Mimma De Petra, Il Saggiatore, Milano.

Paso, Alfonso (1964): “La corbata”, Federico Carlos Sainz de Robles (ed.), *Teatro español 1962-63*, Aguilar, Madrid.

<http://www.rae.es/> (Real Academia Española CREA ウェブサイト) 2010年5月31日検索。